

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003		
法人名	有限会社 あい		
事業所名	グループホームあい		
所在地	熊本県八代市島田町863番地3		
自己評価作成日	令和6年 1月22日	評価結果市町村受理日	令和6年3月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和6年2月3日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設20年を迎え、改めて”であい、ふれあい、支えあい、慈しみあい”を基に、利用者の”我ままに暮らしたい”という言葉をもとに、スタッフは小さな気付きや本人の困りごとなどに耳を傾け、話し合い、情報を共有し、日々の生活を支えている。目を閉じられる、その瞬間まで”我のまま”が実現できる様に介護、医療、医師の協力を得ながら支えています。そのなかで、感染症により、人との交流が希薄になってしまった部分では、再構築や時代に応じた新しい構築方法を、考える必要があると感じている。開設時の町内は、見渡す限りの田園が広がり、自然豊かなで静かな、環境だったが、現在では、住宅街の中にたまたま様になった。新たな環境で、住民との新たな関係づくりの取組みを検討、実現出来る様に目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホーム周辺はこのところ民家や集合住宅の建設ラッシュが続き、ベランダから遠くの山々を眺めることもできなくなり、ご来光は建物隙間から拝み新年を迎えている。外国からの特定技能実習生は入居者にとっても孫のような存在となり、一緒に懸命介護に取り組む姿は入居者やホーム内全体にも新しい風をもたらしている。開設時から本人が今一番望まれていることを家族と一緒に話し合いながら日々の支援が行われており、その中で地域で目を閉じるためには医療機関や医師同士の連携を望みたいとしている。患方巻のCMを見て「これを1本食べたい！」との入居者の要望に、職員は自宅で行うしてみても提供するなど、ホーム内調理だからこそできる取組である。開設から20年、理念である利用者の”我のままに暮らしたい”を叶えるホームとして新たな年月を重ねていきたい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	会社の理念は基より、ホームの基本理念”我のまま暮らし”は開設時の利用者さんの思いをそのままホームの理念にしている。普段もスタッフが目に入る場所に掲示している。またカンファレンスを行う時には理念を根拠にケアが行われるように振り返る様に働きかけている。	法人からの異動や外国からの特定技能実習生を受け入れ、職員体制にも新たな変化が生まれている。ホームの心配とは裏腹に入職者をすんなり受け入れられるなど、今では入居者が孫のような目で見られている。理念”我のままに暮らしたい”はホーム内にしっかりと根付き、新たな職員へも受け継がれている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染症流行により、地域との積極的な交流が出来なかったが、町内回覧板を通して地域の情報を得て年二回の町内清掃活動に、スタッフが参加。また、街並みや風景が変化してしまう程、建設が進み、新しい住民の増加が見込まれる、今後は働くスタッフが持っている地域との繋がりを見出し、ホームの認知度等の広報活動に取り組みたいと考えている。	開設から20年、ホームの歴史を見守ってきた自然豊かな地域は新幹線の開業以来新駅周辺の宅地化が進み、世帯数も膨れあがっている。その中で入居者は職員とともに変わりゆく風景もまた良しとしながら、建築中の家々を眺めつつ散歩に出かけている。	今後は新たな地域交流を模索しながら、ホームに出来る事で人々と繋がりたいとしている。職員のアイデアが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域へ直接出向く機会は、少なくなったが地域の方々との認知症の方への支援の在り方を話す機会を作っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホーム内で入居している情報、生活の様子や、取り組み、研修状況等を運営推進会議を通し意見をもらう様にしている。	本年度は法人の別棟で対面での開催が出来ており、行政や包括、地域や家族代表者が参加している。管理者とともに新たな職員も同席し、まずは推進会議の意義に触れてもらう機会を作っている。ホームの現状について報告を行い、参加者からの質問や意見に答えている。議事録は書面にて全家族へ伝えるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	長寿支援課から、様々な研修案内や情報発信がある。運営上わからない事や困った事等があると相談や確認し、連携を図っている。また八代グループホーム部会では介護報酬改正や市から事業所へ向けての合同研修等の講師として協力してもらっている。	行政には運営推進会議に参加してもらって他、不明な点があれば質問に応じてもらい適切なアドバイスを受けている。八代郡市のグループホーム連絡協議会が機能しており、研修会には講師として行政からの協力が得られるなど、友好的な関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員や内部委員の意見、工夫等踏まえミーティング会を通し振り返る機会を作っている。社内研修では、スタッフが研修を立案し、担当スタッフが資料を作成し講師となり、学びや振り返りを実施している。	法人代表者や管理者などによる適正化委員会を毎月開催し、内容は職員に伝達されている。その中で言葉については「ちょっと待つて」が多くなったことや、車いすを入居者に声掛けすることなくスタートさせたことなど、言葉の掛け方やタイミング、選び方について自己を振り返るようにしている。虐待防止委員会についても立ち上げており、身体拘束と同時に研修を開催している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修を通し、理解度促進とスキルアップを行っている。不適切ケアが虐待につながることを理解できる様に取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会などで学びの機会を設け理解に努めている。必要時には研修が活用ができるよう内部研修等を学びを深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には利用者を含め、家族へ不安や疑問点がないか確認しながら、分かりやすく説明する様に心掛けている。介護報酬改定等の変更があった場合にも都度説明し同意を得る様にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時に家族からの意見や要望を聞き出すように心掛けている。利用者担当スタッフが細やかに対応出来る様な体制をとり、気掛けて主任や管理者が声掛けし、家族との会話を心掛けている。以前のように自室内でゆっくりと面会時間を設けられていないので、もしかしたら、意見や要望を伝えられる機会を失われている可能性もある。	職員はコロナ禍で入居者と過ごす機会が制限される家族と極力会話の機会を持つように心がけている。入居者の節目の祝いにちゃんちゃんこなどの衣装を準備されたり、外出時のマスクや服装の要望を出されるなど、家族の思いを大切にしている。入居者には特に食事の要望や、外出などの希望を遠慮なく話してもらうような雰囲気づくりに努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者とは毎月運営会議や各委員会を開催し代表を含め運営やスタッフの職場環境改善や工夫などの意見交換の場になっている。スタッフの意見は日常などから、疑問等を取り上げ、月一回のミーティング会でスタッフと一つ一つの問題など確認、解決をしている。	外国からの職員の入職により、職員全体の意識向上やチームワークの重要性を実感している。管理者は普段から職員意見や相談事に応じながら、年2回の個別面談の機会を設けている。年度初めに立てた個別の年目標を評価しながらケアの向上を図り、希望休や有休取得等により心身ともにゆとりをもって業務にあたるようにしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	向上心を持って働ける様に、スタッフに応じた研修会への参加を声を掛けている。また日々スタッフの様子から、体調やストレスなど含めスタッフの個別に面接を行い改善を図る様に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個人に応じた外部研修やホーム内研修の立案・発表・現場実施など行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染症期間は、交流する機会は極端に減少した。八代部会で行っている共同勉強会の参加や管理者のネットワークを活用し相談している。ZOOM研修への参加を通し、同業者のつながりを大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談から入居まで、ご家族や本人の不安や困りごとや悩み要望を聞いたり、傍で安心を感じられる様にし、本人が居心地が良い様に、利用者やスタッフとの関係づくりを大切にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の要望や心配に思っていることを受け止め、家族が感じている不安な要素をしっかり聞き取り不安解消に向けて対応している。その為管理者、担当スタッフだけではなく全スタッフ間での情報共有も大切にしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の困っていること、改善出来そうなことを確認し、入居へつながらなくとも他のサービス利用等も含め、柔軟に対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の大先輩から様々な知恵や工夫を学び、尊重しつつ共に生活していく者として、生活に必要な場面では、本人の気持ちが自然とうごくような支援・協力しあう様にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人にとって、家族の存在は、何にもかえがたい存在であった事を、伝え続けている。また様々な場面で家族への報告、相談を密にしながら行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	長い事愛読されている雑誌や小説を楽しまれたり、塗り絵を少しずつではあるが、完成を目指していたり、生家近くの山を眺めることや、水害で流れてしまった生まれ故郷の話や外出する事がある。すぐに行動へうつせない事もあるが、その時感じた思いを実行する様にしている。	家族は面会を兼ねて入居者の衣替えに季節の服を準備して来所されている。馴染みとなった地域からのカット訪問時には八代の昔話に花が咲いている。誕生日には水害で被災したふるさとに数年ぶりに出かける等入居者に馴染みの場所を訪れている。テレビで見た恵方巻の映像に「1本丸ごと食べてみたい」との声が上がり、節分は手作り恵方巻を頼張るなど季節の行事を祝うようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	座る場所、レクリエーションの場所、くつろぎの場所等日々工夫している。「トイレは向こうが開いているみたい」等、日常会話でよく聞かれる。また「お茶が入った様ですね」とリビングへ行ったりと、挨拶から日常生活でも溶け込んでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取りを終えたが家族様から、新入居のご紹介や、近況をお聞きしたり、お電話でのやり取り等繋がりは続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人には、どうしたいのかと希望を尋ねている。引き出すことが困難な時には、ご家族へ伺うことをある。また本人の行動や日常会話から、本人の思いなど引き出すように努めている。	職員を入居者の担当制としており、外出やその他の要望について普段の会話の中から引き出すようにしている。入居時には家族へこれまでの入居者の生活の様子などを記入してもらい、支援に反映するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前にご家族がわかる範囲での、大切にしていること等を記載し、なるべく自宅と変わらない暮らしが出来るようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前の場所や環境を把握したり、ご家族から情報を引き出したり、会話の中から本人が自宅でこだわっていた事等、をスタッフと共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーや担当スタッフは、本人、家族の意向を聞き、ケアプラン実行時の本人の言葉等を記録に記入している。	ケアカンファレンスの時間を設けてはいるが、職員は日々気づいたことをその都度提案するようにしている。入居直後の初回プランではその日の衣類を自身で選択したり、見守りながらの入浴や排泄の自立支援を支える等を盛り込んでいる。これまで通りの生活を送るための残存能力の見極めや家族との繋がりを支え、その後の状況をみながら評価、分析し、本人の更なる力を引き出す内容を次回プランにつなぐようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人との会話や状況、表情や行動は、そのまま記載し、その際の気づきや工夫などを、活かし次のケアへの繋げるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状況に応じて対応しているが、工夫やアイデアを生かしながら出来るように努めている。訪問看護や医療、歯科等利用をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	感染症にて外部と交流する機会が殆どなくなってしまったが、これからは交流する機会を作っていこうと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は入居前からの医師で継続して頂いている。受診が困難になってきた場合は、家族と相談し、看取りまで可能な往診の協力が得られる医師へ変更し対応している。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援しており、現在訪問診療と家族による受診外出支援が行われている。受診外出が困難になったら往診可能な医療機関への変更を依頼している。歯科は必要に応じて訪問診療で対応されている。ホームでは日々の関わりの中で入居者の状態の変化を見逃さず、また併設の訪問看護とも連携を図りながら、入居者の健康を支えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	身体変化などあれば、職場内の看護師に相談でき、また併設の訪問看護への相談ができ、受診や医療処置などできる様にしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、日常ケアの方法等の情報の提供を行っている、また入院から退院までこまめに、医療連携室と連絡をとり、本人の情報収集をしているまた、継続的な医療観察が必要な場合は、訪問看護利用など利用できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際に終末期の意向を伺い、事業所の方針をお伝えし、その都度変化する状態時には、家族、主治医、ホームの出来る可能な事を、密に話し合い、家族が判断・方向性など迷われても、家族の気持ちに寄り添い、本人、家族が望む最期の実現出来るようにしている。	入居時に事前指定書により本人・家族の意向を聞き取り、その後も必要に応じて家族との話し合いの機会をもっている。開設当初からホーム職員ができる事を伝えながら、双方の密な関係を作り意向を聞き取っていくこととしており、全員がホームでの最終を望まれている。この1年でお一人の看取りを支援した際は、人生の最終章をコロナをもって閉じられないことを目標に掲げ支援されている。看取り支援については、職員のメンタルケアについても重要視し取り組んでいる。	看取り支援の際感染症に配慮しながら、家族の面会、宿泊も支援され、「皆と旅行に来たごたる」と安心されたようである。ホームは本人が今望まれていることを職員と家族が話し合いながら支援されており、変わらぬ姿勢に期待したい。管理者は地域の中で目を閉じるためには、医療機関や医師同士の連携を希望すると語っている。地域密着型の事業所として地域の中で過ごすことの意義をあらためて考える機会となる事が期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応に関しては、反復訓練や研修を受け、緊急時に対応できるようにスタッフは努めている。また消防署の協力もあり、心肺蘇生や通報の実践訓練を行っている。	/	/
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練実施時にも、“自分”が瞬時に考え出来る様な訓練を実施し消防署や点検委託業者の意見をとりいれ、みんなが助かる方法を考える機会(話し合い等)を作っている。	この一年では3月に水害を想定した訓練、7月に地震による火災を想定した通報訓練を実施している。地震想定では実際、物品を倒して避難方法を考えてみる等、少しでも実践に繋がる訓練を心掛けています。火元は毎日確認し、ホーム周辺のチェックも行っている。感染症備品は通販を活用し速やかに購入しておりホーム内や関連施設に保管している。食備蓄は職員と入居者も食してみ、その方に応じたものを準備している。BCPについては作成が済みであり、今後は職員との共有を行うこととしている。	ホーム周辺は民家や集合住宅の建設が進んでおり、開設時とは異なる地域環境となっている。今後も運営推進会議などを活用しながら、災害対策に関する協力体制について検討されることが期待される。

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者のそれまでの人生の歴史や人となりを知り、その人らしさを考え、大切にしたいケアの実現に務めている。	言葉遣いはイントネーションなど共通認識をもって入居者の尊厳に配慮するようにしている。呼称は入居時に家族へ希望する呼ばれ方について確認しており、苗字や下の名、お母さんなど個々やその時に応じて対応している。写真掲載など個人情報の使用については、本人・家族の了承を得ている。今年の正月はホーム周辺に家が建ったことから、これまでと違い建物の隙間から御来光を拝んでもらったが安心されたようである。管理者はこのことが外国からの実習生にも日本の習慣や誇りとして伝わったと語っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の出来る事でも、本人の意思を確認し、本人の気持ちやペースに合わせている。意思決定困難な場合でも、わずかな本人のサインを読み取り、情報を共有している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活の流れはあるが、利用者のペースに合わせて、状況を見据え声掛けをしている。その時に希望に沿えない事があっても、日程を決め実現する様に心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自己選択可能な方は、選択が可能なようにクローゼットの環境を整えるよう工夫し、困難な場合は入居時に”大切にしていること”シートを基に、推測したり家族から情報を得て、本人が好まれていたおしゃれを取り入れている。また整髪に関しては、訪問カットがきて、本人や家族からのカット希望を取り入れてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	旬の野菜を中心に献立が決まる。肉や魚は専門業へ依頼し、肉のサイズや薄さ、骨抜きなど利用者の状況に応じてお願いをしている。同じ献立だが、普通食、一口大、ミキサー食、大盛り小盛など個別に提供している。希望するスタッフも同じ献立を食べる事が出来、食事の感想など利用者提供食への意見を求め、調理法など様々工夫している。	調理専任者2名が中心になり、入居者の好みを聞いたり、その日の材料、前日の献立を確認しながら重ならないような料理を提供している。入居者は豚カツなど意外と脂っこいものも好まれるようである。食材は専門店(肉・魚)や、野菜は地物を利用している。また、入居者の楽しみなおやつなどは移動販売も活用している。食形態は一口大やミキサー食、粥など個々に応じて準備している。今後は職員の特技を活かしてカフェメニューの提供も取り入れたいとしている。入居者の楽しみに繋がると思われる。	節分の恵方巻を提供した際に、職員も事前に自宅で予行するなど入居者に喜んでもらうための努力が窺える。かわらぬ食事支援への取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	出来るだけ偏らないように、心掛けている。水分摂取が少ない場合は、飲み込みの状態や好む味など、様々試し、集中的に観察が出来、それぞれの気づきから本人に一番良いことを提供しようと心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔状況が異なるため、利用者さんに応じた歯ブラシの形状や口腔清潔等を工夫をしている。必要に応じて歯科往診を依頼し専門的な助言をいただいている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンの把握に努めている。トイレでの排泄が出来ることが、生活への意欲や尊厳の保持につながると思っているので、トイレでの排泄が出来るように考え支援している。	排泄パターンを把握し、個々に応じた排泄用品を使用している。オムツの方にはパットを使うタイミングについても職員間で検討している。またトイレでの排泄は尊厳の保持に繋がる事を共有し、日中は基本的にトイレでの支援に取り組んでいる。排泄用品の使用については、サイズや支援方法の工夫等ホームの取組を家族へも伝えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	昼食時には食物繊維を多く含む麦ごはんを提供。午前には甜菜糖と黄な粉と牛乳を準備し、自然排便を期待している。日常には下肢訓練運動の時間を作り実施。それでも排便コントロールが必要な方は主治医と相談し、内服薬等で行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2～3回支援している。本人の入浴温度に応じ、ゆっくり入ってもらえる様にしている。また男性職員が介助する場合は、その都度本人へ承諾を得ている。その日に入浴できなかった場合は次の日に対応できるようにしている。	入浴は基本的に週3回、個々の好みの湯温でゆっくり入ってもらえるようにしている。拒否をされる方には入りたくない理由を考えながら対応している。また、足浴をしながらのシャワー浴やシャンプーハットの使用など個々に応じて支援している。シャンプー類はホームで準備しているが、本人こだわりの品を持参される家族もおられる。同性介助への希望があれば応じており、特に入居間もない方にはしばらく様子を見ながら本人の気持ちをくみ取るようにしている。	入浴剤は季節に応じて使い分けるなど工夫しており、菖蒲や柚子湯も全員が楽しめる日数取り入れている。今後も入居者の楽しみとなる入浴支援への工夫が期待される。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	眠りが上手いかない場合は、眠り具合の情報を共有し、原因を探る様にしている。また現在は寒さなどから中々寝付けない事もあり、就寝前には暖かい経口補水を飲用したり、湯たんぽで寝具を温めたり、室温の調整もこまめに行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別に内服薬(効能、服薬方法、副作用等)を確認できるようにファイルしており、個人のファイルにも記載しているが、全スタッフが把握しているとはいえない。また内服時には、間違えがない様に、名前、日付、いつの内服を呼名確認し本人へ渡している。また本人が服薬が困難になった場合は主治医へ相談している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴を基に、個々に応じて可能な動作を継続できる様に支援している。また生活歴を基に、台所付近で過ごしている方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的に、本人の希望により近所へのお散歩へ出かける事がある。直ぐに対応できない場合は、なるべく近いうちに、実現劇様になっている。また個別にドライブへ出かけたり、自宅近くのなじみのある神社への参拝等行っている。家族の協力もあり、感染対策協力のもと外食を楽しまれている。	可能な限り外出への要望に応じており、近隣の建設工事の様子を見ながらの散歩は、入居者の楽しみとなっている。1月には自宅近くの馴染みの神社への参拝、港見学、がめの資料館「どんどん館」への外出も行われている。個別支援として自宅近くの道の駅への立ち寄りや担当職員との外出も行われている。また、感染症対策を施し、家族の協力により祝い事での外食も実現している。	コロナ禍により外出支援を控える状況が続いていたが、家族との外食や地域資源を活用した外出が少しずつ再開されている。これから過ごしやすい季節に向かうことから、外出の幅も増えていくことが期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	殆どの方が現金を所持をしていない。移動販売時に買いたいものを一緒に選び、皆さんと頂いている。また必要な物品に関しては、ご家族へ相談し購入をお願いしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	個別の携帯電話をお持ちの方いる。自分からかける事は無いが、ご家族から係る事があり、会話を楽しまれている。お正月には、本人が家族へ年賀状を出されている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には、季節に応じた飾りや活動写真を掲載している。(玄関での面会の為)。縁側からの景色は現在工事中の為、景観が悪いが、工事が終了したら縁側での空間活用が出来る。談話室は、畳に座れる方がいない為、ソファを配置し、足元にジュータンを敷いている。リビングで過ごしやすい様に(趣味活用)工夫している。	ホーム内には職員が持ち寄った草花や月ごとの壁面などが飾られている。コロナやインフルエンザなど感染症への対応に職員はまだ気を緩めず努めており、換気や掃除、消毒などが継続されている。食事や日中の活動で過ごすリビングの席は、入居者の相性なども考慮して決定しており、入居者と職員の談笑や、気持ちよさそうに爪の手入れを受ける方など穏やかな光景が見られた。縁側からの眺めは現在、工事中のため景観が損なわれているが、工事終了後は以前のように休憩スペースとして有意義な時間を過ごしていきたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	場所の異なる部分に、椅子やソファを設置している。本人が部屋以外で趣味や読書を過ごしやすい様している。また、利用者同志の相性などを考慮した、配置にも気掛けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者一人一人に担当スタッフがいる。そのスタッフと衣替えしたり、お部屋の掃除をし、本人にわかりやすい様に配置したり、一緒に掃除をする機会をもっている。	民家を改修した建物であり、部屋の広さや趣などが異なり、家庭的な雰囲気が安心して過ごせる空間である。新しい入居者には家族や担当職員と一緒に本人にとって過ごしやす部屋作りを行っている。まだ家族の入室が制限されており、衣替えなどは家族とやり取りをしながら実施している。入居時にテレビを持ち込まれた方も、あまり見られない場合は家族と相談し持ち帰ってもらう等、状況に応じて検討されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分で排泄が可能な方へは、トイレ内で分かりやすい様に表示し、移動しやすい様に整理整頓に気掛け足り、立ちやすい様に活用できるテーブルを設置し、自立した生活が遅れる様に工夫している。		